

チンパンジーの森とヒトが共に歩む未来

財団法人横浜市緑の協会 動物園部

横浜市立よこはま動物園 川口 芳矢

はじめに

動物園には、「希少動物の種の保存」「環境教育」「調査研究」「レクリエーション」の4つの社会的な役割があると言われている。動物園のレクリエーション面が注目されがちな昨今、動物園と野生動物の生息地とをより密接につなぎ、生息地の状況や問題を動物園からリアルタイムに発信することができれば、来園者をはじめとした人々が動物園で飼育展示している動物だけでなく、その先にいる野生下で暮らす動物たちへもより関心を持ってもらえるのではないか。そんな思いから、野生チンパンジーが暮らすアフリカ大陸ウガンダ共和国内の森林保護区で2年間活動する経験を得た。今回は、休職して参加した2年間の海外野生動物生息地での活動紹介と、現地から行った動物園との連携、復職後に経験を生かして実施した事例を報告する。

野生チンパンジー生息地での活動

ウガンダ共和国南西部に位置するカリンズ森林保護区には、生息数が450頭と推定されているチンパンジーをはじめ、多数の野生動物が生息している。ウガンダ国家森林局が管理するこの森林保護区は、日本では国有林に相当し、一部の区画では指定業者による樹木の伐採・製材によって森林を活用する他、保護区画や教育・娯楽分野で利用する区画も設けている。このカリンズ森林保護区で平成19年3月～平成21年3月までの2年間、独立行政法人 国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊員として、「エコツーリズムの導入と発展」、「エコツーリズムに向けたチンパンジーの調査及び人づけ」、「エコツーリズムの導入に伴う地域住民の生活及び収入向上」、「地域住民への環境教育の促進」などに向けた活動を行った。

エコツーリズムとは、自然環境や野生動物、文化的遺産などを守る活動に観光という要素が加わったもので、それによって環境を維持している地元の人々にも利益を還元する、自然との共存を目指す手法である。エコツーリズムから利益を受けると同時に、地元住民にも森林や野生動物保護に対する理解を促進することを目的とする。カリンズ森林に導入したエコツーリズムのプログラムでは、森林を散策して野生動植物を観察する以外に、周辺村落を訪れ地元の家族と共に地元料理の調理体験をして食事するというコミュニティーツアーも設定して、参加者と地元住民の相互理解を狙った。さらに、ウガンダで主食として多く栽培されているバナナの、普段は廃棄される幹や葉を利用して地元の女性達が作った小さな籠に、森林周辺で栽培される紅茶を詰めて開発した土産物を販売することで、地元住民の収入向上につなげた。

現地から動物園との連携

カリンズ森林での活動中、生息地と動物園とを繋ぐべく様々な連携活動も行った。

よこはま動物園ホームページ上での現地活動報告ブログの更新。

横浜市立動物園友の会季刊誌への寄稿。

広報ヨコハマをはじめ、テレビや新聞などへの寄稿及び取材対応。

よこはま動物園内で実施した企画展でのパネル展示。

日本国内の動物園飼育係が参加したカリンズ森林野生チンパンジー観察ツアーへの協力。

横浜市立動物園とウガンダ野生動物教育センターとの間で行われている技術協力プロジェクトへの現地サポート。

当時よこはま動物園で新規開園予定だった「チンパンジーの森」エリア建設に関わる現地サポート。

いずれも、動物園職員として休職して参加していたからこそ可能となった連携であった。

復職後に実施した事例

平成 21 年 4 月の復職後、よこはま動物園に新規開園した「チンパンジーの森」担当班への配属となった。現在チンパンジーの飼育業務と平行して、生息地での活動経験を生かすべく業務を進めている。

生息地での経験を踏まえた来園者へのガイド。

各種イベントや研究会での活動報告（予定も含む）

野生動物だけでなく、周辺で暮らす人々の生活も含めた環境教育・国際理解教育プログラムの実施。

おわりに

今回、2 年間という長期で野生動物の海外生息地で活動したことで、資料や文献からだけでは見えなかった様々なことを実際に感じる事ができた。野生チンパンジーの生態をじっくり観察できた事はもちろん、生息地周辺の人々の生活や彼らと森や野生動物との関わりなどを直接見られたことは非常に大きな収穫であったと感じている。現職の動物園職員が長期で野生動物の海外生息地で活動したことは、国内では非常に稀な事例である。動物園で飼育されている動物は野生からのメッセンジャーであり、動物園は彼らの声を人々に伝える大きな使命を担っているからこそ、今後この経験を活かして野生動物の現状だけでなく、そこには私たちと同じヒトが暮らし、自然環境や野生動物と関わりながら生活している事を伝えられるような教育活動ができればと考えている。これまで動物園ではあまり触れられなかった国際理解教育は、野生動物保護にも大きく関わっており、地球規模の環境問題を扱う上でも動物園が今後踏まえていかななくてはならない分野であると思われる。